

脱焼却・脱埋立への道を考える（私のゼロ・ウェイスト戦略＝ゴミゼロプラン）

2003年11月23日 「ゴミゼロプラン静岡」市民ネットワーク 壺阪道也

1. 「ごみは焼却するもの」という呪縛

誰が決めたのであろうか？この日本ではごみは焼却すると決まっている。ごみ問題をここ数年取り組んできたつもりでも私も恥ずかしながら、ごみを減らしてもその残りは焼却すればよいと考えてきた。行政主導のリサイクルの問題点を上げれば、「それなら燃やした方が良いですね！」という反応に特別目くじらを立てて反論まではしてこなかった。

「ミニペットが売れない街・静岡を創りたい」はおかげさまで思った以上に反響があった。私は「ペットボトルのリサイクルを止めて燃やした方が良い」などと言ったつもりはまったくないが、「やはりそんなに税金を使うのなら燃やせば良いですよ」という反応も一部にあった。実は私自身も含めて日本中が「ごみは焼却するもの」という呪縛から解放されるには、いろんな努力が必要だ。そのためにはいろんなハードルがある。「何をすればハードルを越せるのか？」はわからないが、私がどうして呪縛から解放されつつあるかを語る必要があると思う。

2. 「ゼロ・ウェイスト戦略」との出会い

ここ数年世間では環境ブームという広がりがあるとは言われるが、実際はなかなかゴミも減らないことへの苛立ちを感じていた私。それでも「ごみは焼却するもの」の呪縛の中にいた私は、先日「脱焼却・脱埋立」の「ゼロ・ウェイスト戦略」の紹介を受けた。

「新規焼却施設の建設を止め、大胆なゴミゼロ目標を掲げ、『燃えるごみ・燃えないごみ』ではなく『資源化できる・資源化できない』という区別から始まる。子どもたちに環境教育と称した『ごみ焼却場の見学』をさせるのは止めるべきだ。

子どもたちが『ごみは焼却するもの』と誤解してしまう。」と環境総合研究所副所長池田こみちさんはある講演会で私達に語った。その話しを聞いて、少しはその呪縛から解き放たれようとしている私自身を感じられた。その時の私は吉津コンポストを含めた静岡市のごみ処理の歴史を思い出していた。

3. 「吉津コンポスト」と静岡市のごみ焼却施設建設の歴史から学ぶこと

（10年毎の建設ラッシュはいつまで続く）

静岡市清掃事業概要に清掃事業年表がある。そこに吉津コンポストという生ごみの堆肥化施設があったことに7年前に気がつき、情報公開制度や図書館でその全貌を調べ、3年前に小論「『吉津コンポスト』研究」を書いた。今になって、手持ちの資料をもう一度分析してみると、いろんな事実は浮かび上がって来た。

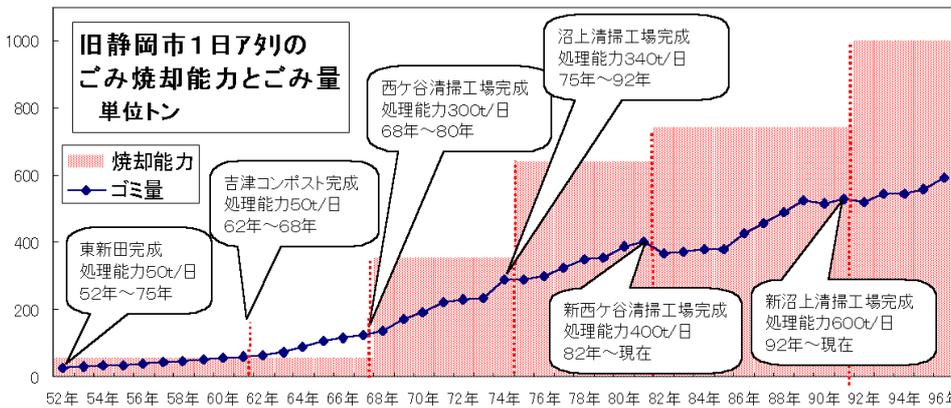
静岡市は50年前の1952年東新田ごみ焼却炉（処理能力56t/日）を完成させ、ごみ処理は「埋立」のみから、「埋立・焼却」の平行処理の時代に入った。当時1日26t排出されていたごみの焼却率は0%から一挙に90%に跳ね上がった。その後ごみの急増で、59年にはゴミ量52t/日、焼却率30%まで一時的に下がる。しかし、61年には同60t/日、焼却率56%に上がっている。（注：焼却率は焼却ごみ量/全ごみ量。ゴミ量の統計は静岡市統計資料の数字を参考に75年以降計量機による算定が始まってゴミ量が約4割減ったことの誤差が起きていることから推計した）

この頃まではごみ処理は「埋立」「焼却」「直接肥料化」の3種類であった。（注：統計によると52年～64年までは全ごみ量の1～2割は肥料となっている。これは現在とごみ質の大きな違いがあり、直接肥料と

することができたものと推定される）年々増え続けるごみに対して、静岡市は焼却炉の拡大ではなく、「...単にじんかい（＝塵芥＝ごみ）を焼却するだ

ごみ処理施設建設と1日7列のゴミ量・焼却率の動き

	52～62年	62～68年	68～74年	75～81年	82～91年	92年～現在
建設施設	東新田焼却炉	吉津コンポスト	西谷清掃工場	沼上清掃工場	新西ヶ谷	新沼上
能力	56t/日	50t/日	300t/日	340t/日	400t/日	600t/日
存在期間	52～75年	62～68年	68～80年	75～92年	82年～現在	92年～現在
焼却能力計	56t/日	56t/日	356t/日	640t/日	740t/日	1000t/日
ゴミ量/日	24～64t	64～135t	135～288t	288～399t	365～527t	527～594t
焼却率	0～90%	20～40%	69～54%	89～75%	90%	90%



けでなく、堆肥を生産し、利用することができるなら一石二鳥である...」(静岡市統計資料より)という観点から1日最大50tのじんかいを処理し、堆肥16tを生産できる吉津コンポストを完成させた。

(参考「吉津コンポスト」研究)

<http://www33.ocn.ne.jp/~gomizeronet/gomizero/yoshidukonpost.PDF>

静岡県浜松市の清掃事業概要によれば浜松し尿じん芥高速処理場(コンポスト)が同様に存在し(50t/日処理 58年~67年)、初めての焼却場建設も65年であったことから、生ごみの堆肥化事業が全国的にも存在していて、「ごみは焼却するもの」という「日本の常識」はまだ60年代前半にはなかったと推測できる。

吉津コンポストの時代(62年~68年)は64tから134t/日とゴミ量は倍増しながらも、焼却率は40% 20%へ逆に下がっていく。資料に見る限りでは出来上がった堆肥も毎年500万円の売上があり、順調そのものであったように見える。

しかし、68年に大きな転機があった。吉津コンポストの廃止と処理能力300t/日の西ヶ谷清掃工場の完成である。焼却率は一挙に19% 69%に跳ね上がった。堆肥化事業と焼却との共存の道はあったはずなのに、大型焼却炉導入によってごみ処理を解決しようとしたのだ。この68年が大きな分岐点と言える。

しかし、ことはそれだけでは済まなかった。それでも68年から74年までに135t 288t/日とゴミ量はまたも倍増、焼却率も69% 54%まで下がっていく。増え続けるゴミ量に対して、資源化ではなく焼却能力を増やすことで対応しようとした静岡市は75年沼上清掃工場(処理能力340t/日)建設で焼却率54% 89%と一気に現在並まで引き上げた。その後、増え続けるゴミ量の影響で81年焼却率75%

まで下がったが82年新西ヶ谷清掃工場(処理能力400t/日)建設で焼却率87%まで引き上げ、その後は90%前後で安定する。次々と清掃工場建設に着手し、安定的にごみ焼却していく仕上げが92年の新沼上清掃工場(処理能力600t/日)である。

この施設建設によって、ゴミ量の2倍の焼却能力を静岡市は確保した。68年、75年、82年、92年のそれぞれの段階を経て気がつけば「ごみは焼却するもの」の呪縛が完成していた。逆説的には、それぞれ新設段階で「呪縛からの解放」のチャンスがあったはずだ。

あるシンポジウムで静岡市の廃棄物担当責任者は「...自治体の清掃事業とは、ゴミを処理すること。ゴミ処理能力=焼却能力が重要なカギをにぎる。焼却能力に余裕が無いと集めたゴミを溜め込まなければならない。...」と言ったことを思い出される。また別の担当者は「2000億円あれば、静岡県のごみ問題は解決する。新沼上清掃工場並の大型施設を建設すればよい」とも語った。限られた財源の中で「ごみを処理する」彼ら担当者は実際「よい成果」をあげた。それは「ごみは焼却するもの」という「日本の常識」に従っていただけだからである。しかし、私達はどこへ向って行ったのだろうか?

4. 余裕が無い清水清掃センター

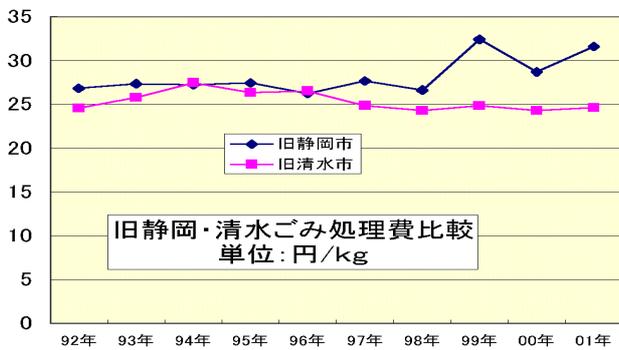
静岡市(人口47万人)と清水市人口(24万人)は今年(03年)4月に合併し、新静岡市人口70万人が誕生した。合併した清水市は少し様子が違う。静岡市はごみ焼却量18.5万t=500t/日(01年)に、処理能力2工場計1000t/日(=2倍の処理能力)に対して、清水市人口ごみ焼却量7.3万t=200t/日(99年)に、処理能力260t/日(=1.3倍の処理能力)と余裕がない。1炉が止まってしまった影響で、合併前の何年かは一部静岡市にごみ搬入を続けた。10年毎に新工場建設を続けた静岡市とは対照的に主力は75年建設の旧型施設である。

その影響で清水市は静岡市では行っていない雑紙回収・剪定木の堆肥化事業・トレーの回収などを行い、「市民に分別リサイクルを押し付け

た？」(担当責任者の弁)のが実状だ。そのため
 が合併前までは、清掃担当職員による毎月1回の
 各地の公民館回りで、「ゴミ減量フォーラム」が
 市民数十人の参加で行われ続けてきた。(合併後
 は廃止、NPO方式での継続への転換を強いられた)

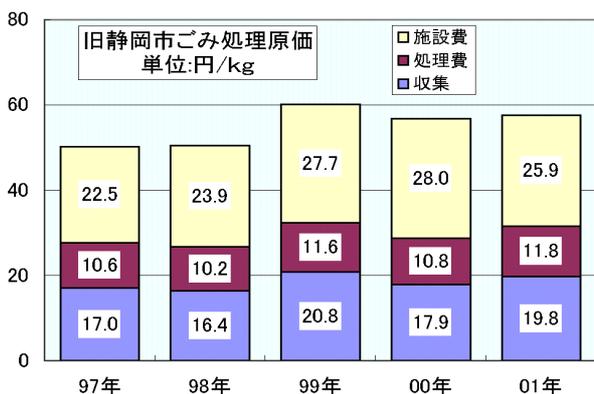
私は、静岡県主催の環境道場の講師として清水
 清掃センターを先日訪れた。施設担当責任者は受
 講生に「旧静岡市、旧清水市どちらの方がよいの
 でしょうか？」と暗に「ごみ処理の流れだけをス
 ムーズにしてはゴミ問題の解決はないのでは！」
 と訴えた。

5. それでも変わらない旧静岡市・清水市のごみ 処理コスト

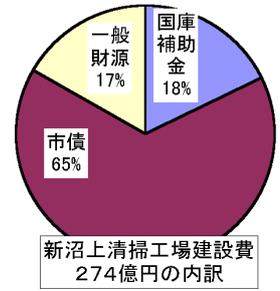


私はその後、講座の中で、受講生に「静岡・清
 水のごみ処理費用はどのくらい違うでしょう
 か？」と問い掛けた。普通に考えれば清水市は安
 上がりで、静岡市は高いと考えられるが、現実
 はまったく違う。1kgあたりの処理費用は25円
 ~30円くらいとほとんど同じ。収集費用は清
 水市の方が確かにわずかに安い処理費用(=焼
 却・埋立)は返って清水市の方が高いくらい
 なのだ。

いわゆるごみ処理費用はその年の廃棄物行政
 の予算額を排出されたごみ量で割った数字。数
 年前にそれに300億円の新沼上清掃工場の施設
 費が含まれていないことに気がついていた私は、
 今年03年6月の静岡市議会にて知人の市議
 会議員を通して「施設費込みのごみ処理費用」
 を質問して



もらった。公称30円前
 後のごみ処理費は実は5
 0円~60円、つまり約
 2倍のお金がかかって
 いることがわかった。言
 換えれば、旧静岡市一
 人あたりの清掃費は年間
 16,741円(02年静岡市清掃事業概要より)
 ではなく、年間3万円以上という意味である。
 それでは誰がそれを払っているのだろうか。



6. たった一割の手付金で近代焼却施設が買える

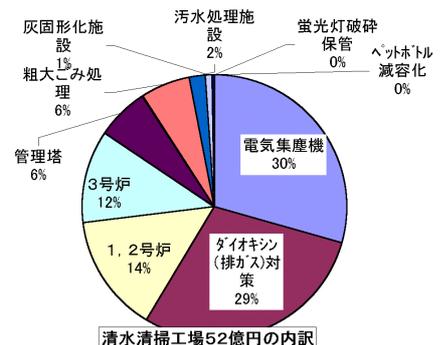
新沼上清掃工場を例に取れば一般財源(年間
 静岡市予算からの支出)は17%、国庫補助金
 18%、市債65%である。市債は地方交付税で返
 さなくても良い場合もある。つまり、たった1割
 程度の手付金を建設期間の2~3年分割で払い
 さえすれば手に入る仕組みである。聞こえが悪い
 が施設費は「隠れごみ処理費」として地方行政の
 負担ではなく国の負担=国の借金として、回り回
 って国民負担になっていく。(注:いわゆるごみ処理
 費用は毎年の廃棄物予算がベース。国の補助金や市の借金
 =市債は含まれない)

「1割の手付金で近代焼却施設が買えるならそ
 の仕組みをうまく利用しない手はない」と市町村
 の廃棄物担当者が考えたのは無理もないことな
 のだろう。ましてや「焼却能力に余裕がないと...」
 と考えるものにとっては。

7. 30億円が消えていく

質素だったはずの清水市もダイオキシン類規
 制のための特別措置法の前には、同じことを行
 う運命であった。「清水のごみ処理」(00年度版清
 水清掃センター編)によれば清水清掃センターの
 約30年間の建設費総額52億円の内30億円
 が電気集塵機15億円(95年建設)、ダイオキ
 シン対策バグフィルター事業費15億円(00年
 建設)としてつい最近支出されている。しかし、
 この2施設で費用の8%=2.4億円を清水市が

支払ったに過ぎ
 ない。一方で、
 施設の老朽化に
 伴い現清掃セン
 ターを廃止して、
 合併に伴い新々
 西ヶ谷清掃工場
 へ数年以内に移
 行する計画と聞



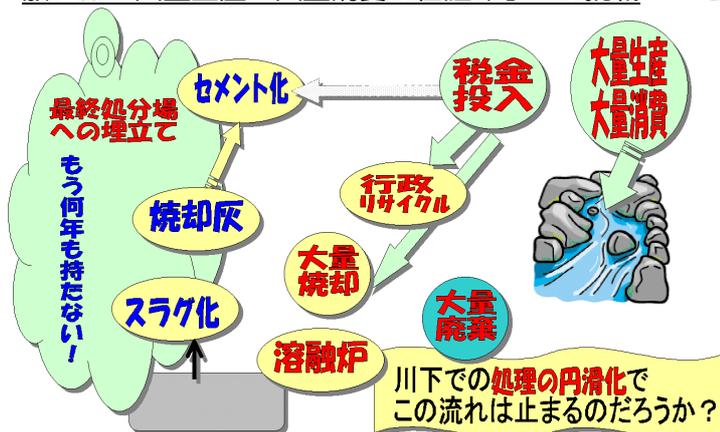
いている。もしそうなれば30億円は泡のように役目を終える。特にダイオキシン対策のバグフィルターは15億円の内清水市は7千万円の支出であるので、痛手は行政にとって少ないが、それで良いのだろうか？

8. 出口の流れを良くすることがごみ問題の解決の道か？

ごみ焼却行政の歴史を簡単に振り返って見て、ごみが出るから 効率的衛生的なごみ処理 = 焼却をする それでも出るからもっと作る 焼却をするからダイオキシンが出る それなら焼却しながらダイオキシンが出ない対策事業を行う 地方にお金が無いなら国が補助金を出す ... という歴史がわかる。「税金と技術の投入」によってごみ「処理問題」を解決しようとした歴史だ。

繰り返しになるが1割の手付金で近代的焼却施設が買える。ごみが増えるから10年毎に建て替えを補助金頼りで繰り返してきた。しかし、ごみ増加の「原因 = 大量生産・大量消費」の「結果 = 大量廃棄」に何の歯止めをかけることができなかった。それは「結果」への対策ではなく、「原因」へ目が向いていないからではないのか？「結果」への対応だけに追われてきたのではないのか？

大量廃棄は間違いなく「大量生産・大量消費の仕組み」が原因である。これは本来資源であるべき「ごみ = 資源」が「資源としてではなく燃えるごみとして処理」されてきたからではないのか。「焼却」とはその次世代へ負担を押し付けるの資源の浪費を目に見えない形での処理することではないのか？市民も企業も結果が焼却灰としてしか残らない時、それを単に処分場が足りない = 処分場問題としてみてきた（それすら気が付かない）。痛みも将来への不安も残らない形である。換言すれば「ごみは焼却するもの」という呪縛からの解放とは「大量生産・大量消費の仕組み」への挑戦



そのものである。もし、吉津コンポストの廃止と西ヶ谷清掃工場の建設が行われた1968年、技術を駆使してでも吉津コンポストの存続を選んでいたら、静岡市の廃棄物行政は違った道を歩んできたはずだ。「余裕があるごみ処理行政」とは市民・企業に「大量廃棄の悲惨な現実」をその担当者の意図とは別に「原因を覆い隠す役割」を果たしてしまっただけでは考え過ぎだろうか。

9. 「ゼロ・ウェイスト戦略」から学ぶ

ごみの中身とは、重量では生ごみ、容積ならプラスチックの容器包装、そして紙類である。この3つが資源として見直しされるなら、ごみなどない。生ごみは貴重な食料であり、プラスチックとは有限資源の石油、紙は森林資源である。それぞれに課題がありながらも私達にはそれぞれを燃やさないで資源化する方法がある。それならそれをやればよいのではないか。私は行政主導のリサイクルに大いなる疑問を持ってきた。その一つを「ミニペットボトルが売れない街・静岡を創りたい」で表現した。市町村いじめの容り法の存在、拡大生産者責任が徹底されていない、デポジット制も確立していないからである。それは国の法制度を含めた問題である。一地方自治体では、一市民にはどうすることもできないことだ。しかしだからと言って、「次善の策として当面は焼却だ」では、大量生産・大量消費・大量廃棄の悪の連鎖は永遠に止まらない。やれることはあるはずで、成果もあげられる。「ゼロ・ウェイスト」とは諸外国での実例で、日本では不可能だと決めつけていたのでは、その前には絶望しかない。

ごみ有料化、戸別収集で静岡市の半分のごみ量を実現した東京都日野市、藤前干潟処分場建設反対によって生まれた処分場の危機がキッカケの大都市名古屋でのごみ量激減、徹底した分別と生ごみの回収で静岡市の1/4のごみ量に水俣市、ゼロ・ウェイスト宣言を発した上勝町、日本でもやれることはあるはずだ。

静岡市のごみ処理史の中で、それぞれの新焼却炉建設の段階でチャンスがあったはずだと私は言った。これは過去の失われたチャンスではない。今も各地で起こっているごみ処理施設建設と住民の反対運動がある。それならそれを造らないで済ます方法を考えることこそが今私達の目の前に広がっている未来へのチャンスではないだろうか？